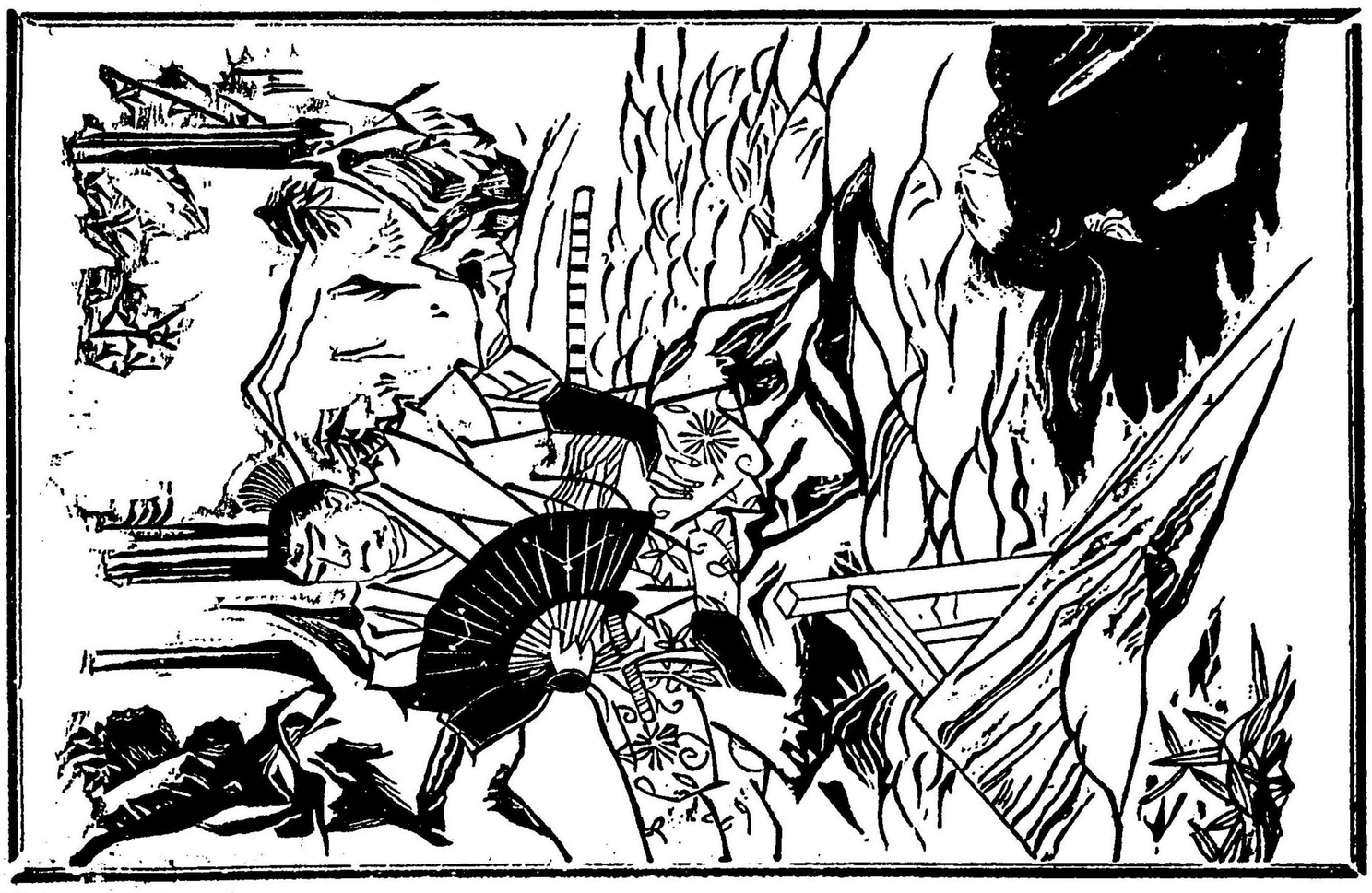
特10
964

№16285



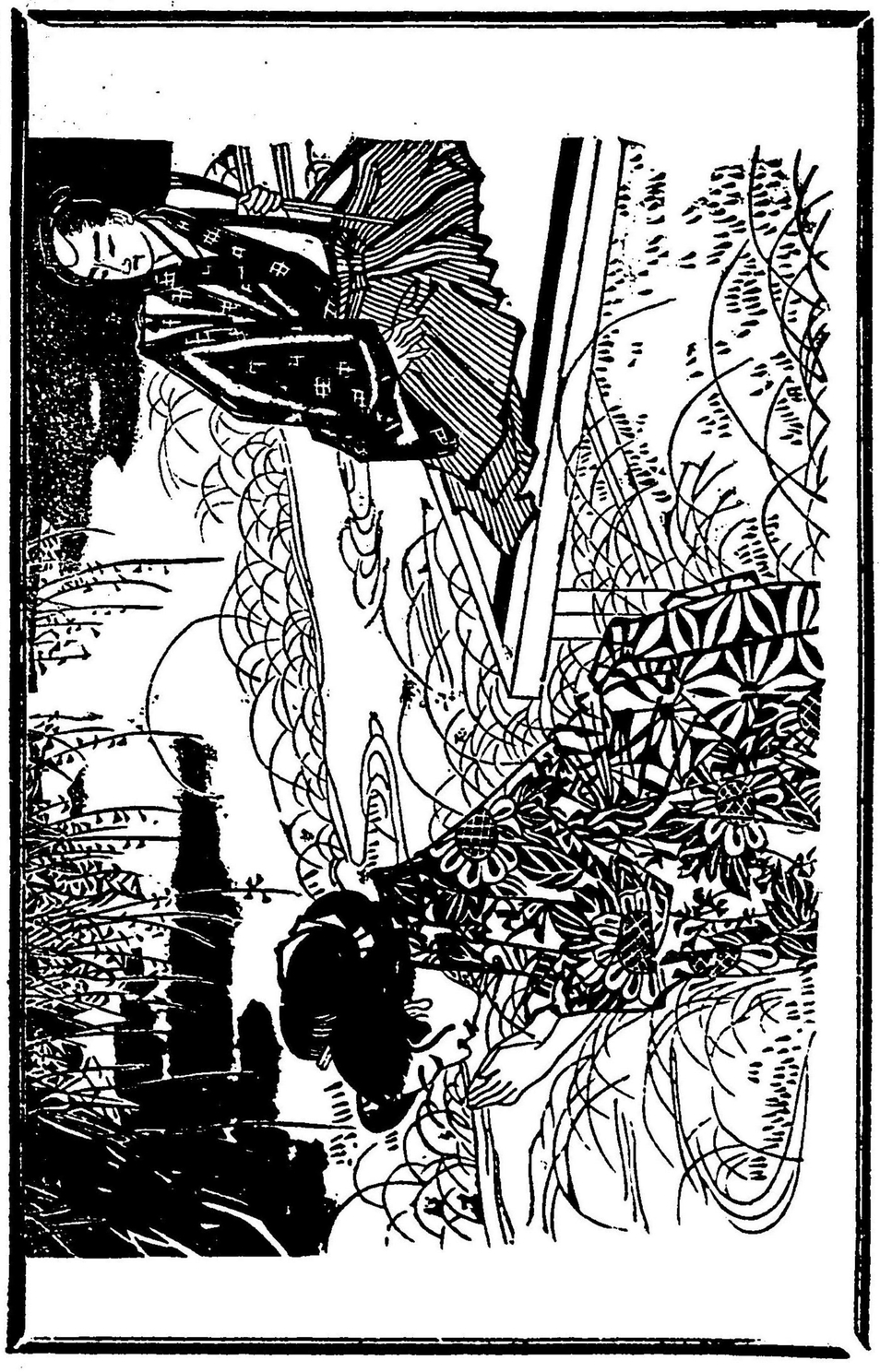
特 10
964

箱根權現蹇讎討

幷 顯如上人石材を献上そる事

○秀吉公大坂城を築かせ給ふ事

劒を撫し惡み視て曰く彼奚んぞ敢て我に當らんやと是匹夫の勇一人に敵そる者なり劒の一人の敵學ぶに足らぞ願いくは万人の敵を學ばんと云ふ是万人に敵そるなり然ば漢の高祖沛より起り馬上に三尺の劒を提げて王位に昇り四百年の基を開くと是至極の大勇とこそ謂べきなれ爰に豊臣秀吉公い天下麻の如く乱れ人心絲の如く縺れ未だ鹿の誰が手に落ると云を知ざるに際し命世の才を以て四海を併呑し世を青天白日の太平に治め給ひ上下鼓腹して万歳を唱ふる中にも治に居て乱を忘れざるの格言を守らせ一の要地を見立て堅城を築くべしと思召と其折柄に六條本願寺十一世の顯如上人太閤へ勸め進らせけるい御居城を定めさすると大坂の地に比ぶ處之なくいと抑も大坂い西三十三ヶ國の大都會として四民輻輳の所といひ西にい滄海の固めあり東にい闇りの險あつて要害も亦甚はだよろしくいへば爰に御居城を築かせられんと實に御子孫繁榮の基ぬと存じいなり幾重にも大坂御居城しかるべくいと申ければ太閤も點頭せられ何樣大坂は故信長公も曾て御居城居させられんとて明智光秀に間竿と打せられしともあり然ば和僧の申さるゝ如く大坂に居城を築くべしと有ければ上人君彌よ大阪に御居城築かせ給ふとならば愚僧も應分の御手傳仕つるべしと申に殿下否〳〵夫い御無用城を築くとい匆々容易からぬとにて先第一が石材なり而して其入費も夥多しき處御身出家の儀なれば右樣のと御存じも無て斯曰ふ成んが先其儀は御無用たるべしと仰らるゝに上人仮令何程石材御入用ある共必らぞ調へ差上ん是非に愚僧へ仰せ付られ度と申に



殿下然らば和僧の心に任せ申さんと有けるにぞ上人心得いと申て退散す夫より上人諸國の末寺へ觸を廻され此度太閤秀吉公大坂表に御城を築かせ給ふに依て石材一式を御手傳致しいへば遠國島々に至る迄門徒たるべき者早々大阪表へ石材を運ぶべしと有ければ諸國の門徒本山顯如上人よりの御觸なりとて各々深山嶮崖の嶽ひなく自身行て夥多の石を堀取船に積込で日々に大阪表へ運びしかば僅かの内に早御城普請にい餘る程石を積上たり秀吉公此由奉行の者より聞し召れ流石顯如上人なる哉是まで厳山南都の法師等處々の軍さに加勢せしと有ども顯如上人の骨折斯の如くなれば後日我天下と取共法躰の者此城に弓を彎と有べから寸實に門徒の威勢の凄まじくも又殊勝なる者哉と大に悅ばせられ夫より掛りの役人を仰せ付られんとて先奉行にい片桐市正且元小頭にい飯沼勘平加藤幸助等と定められ其外石工番匠の諸職人を幾万人となく集られて彌よ大阪城御普請をぞ始めさせける然により太閤間竿の打樣など委細片桐へ御差圖に及ばれ且元其如くに繩張等を始めし處圖らずも先年光秀が經營せし杭木に堀當りしかば且元實に名將の深慮は萬事斯の如く符合せ一者かなと獨り感嘆なして居たりしとかや

○御城普請の諸役人水邊にて酒宴の事　并　飯沼勘平勝女と契る事

秀吉公の仁政より因て治まる御代の御普請なれば諸工力を盡して勵みける故段々と工事捗取り石垣も畧出來しけるに時しも七月の盂蘭盆なれば暑の強きに堪かね諸役人等皆淀川の邊へ打集ひ酒肴を調へて納涼の宴と開き或は語り或は笑ひ暫の間は鳴も止ざる愉々快々に皆々意外の大醉をなし前後も不覺に興じいりける其内に夜も良更て波間に映る月影いとい清けく見へし折しも加藤幸助飯沼勘平の兩人思はず其座に臥轉び肱を枕に假寢をぞ共なしに寢入たる其間も有ぞ早人々の歸りしかば幸助此物音に目を醒し勘平が能寝入し体を見て偖々強ひ醉樣かな率起して一緒に連行んヤヨ勘平大人よ起給ひねと一聲掛しが不圖思ひ返し否々此人こそ平常より忌はしと思ふ人あれ假令軍功あるにもせよ大閤の御意に入と有て祿も三千石を頂戴し人を人と思はぞ兎角威張散して居ると奇怪なり我とても豊無手柄なしと云ふにも非ず然るに我は祿も彼に及はず僅に千二百石にて在と思へば口惜き次第なりヨシ〳〵彼寐入て居るころ幸ひ置去に去て歸るべし然る時は彼必らず夜明までも目を覺さず普請場へ赴くとも夫が爲め延引し奉行片桐殿の手前も少しい不首尾を相成べし是好き報怨あり然じや〳〵と一人點首遂に同役の勘平を打捨已れ一人假屋を指てぞ立歸りける跡にい勘平只一人暫し寐入て居たりしが不圖目を覺し四邊を見るに何時の間にかい幸助を始め皆々の者居らざれば大いに驚き早速自分も歸らんとして出掛し處那邊に有し一藪の薄動きしのば思いず是を見て有處に不思議やな年も二八か二九からぬ最と美しき少女が半ぐけ帶の其まゝにて如何にも臥床を忍び出意中の人を待が如きの風情をなし懐中より小硯出して何やら薄葉へ書記し程遠からぬ向ふの川へ流しければ勘平心に思ふ樣之正しく狐狸の術なら寸我今此處に只一人醉臥て在を付込て誑かさんとは仕たる成べしいでや目よ物見せて呉なんと少女が側らへ突と立寄汝れ何者なれば斯る夜更に此處へは來る定めて狐狸の類ひならん早く正体を現はさばよし然なくば打殺して呉んぞと天地に響く大喝一聲怒鳴り付れば少女恐れて物をも得いはず戰き怖れて逃廻るを勘平扨てそ已れ遁しはせじと刀を抜て付廻

せば少女今い足も進まず磴と傍へ倒れけるにぞ勘平驚き扨は狐狸にては無りしや近頃以て氣の毒のことを爲たりしと急ぎ水をば口に含ませ種々介抱なしけるゑ暫く過て漸々に人心地付しかば勘平心靜に御身如何なる者にて在そるや氣をば慥に持れよと云に少女妾い更々怪しき者ならず是より向ふに當りたる多田野と云る其所に住かも然まで賤からぬ長者の娘にて名をば勝女と申候頃しも去年七月の今日に慈母を失なひ便り少なの身と成て漸々親族の者の世話に成り憂き月日を送りし程に今宵ふと父母の事を思ひ出し寢所を抜出今はしも盂蘭盆の功德に亡き慈母へ手向の爲念佛記して此川水へは流し候なり便り無身の遣る瀬なき惘然の者と思し召御許し下され給へかしと語れば勘平始終を打聞き扨々神妙なる心かな貴女斯孝心と有からにい我兎も角も能きに計らい得させ申さん我は則ち御城普請の役人飯沼勘平と云者なり頓て秀吉殿下此所に御居城し給へば我々も亦此所へ住居せん然ば其時貴女と召出して吾左右にハ差置ん先づ夫までは云乍ら跡は思案の外話しに飽ぬ妹背を結びける斯て夜も追々に更け渡れば又の逢瀬を契りつゝ其夜は其儘別れけれ共飯沼勘平今年卅三歳にて而も十三歳に成る初五郎といふ悴もあり其上妻もまだ裏若きに是より後は毎夜〳〵に出逢し是ぞ身の大害とは成にける

○加藤幸助勝女に横戀慕の事　幷　加藤幸助飯沼勘平を欺し討にする事

扨も飯沼勘平夜毎に假屋を出て何時も深更まで歸り來らざれば幸助之を不思議に思ひ或夜窃かに勘平が出行跡を付覗ひ淀川の流に添て下り行處一人の少女西の方より川邊傳ひに此方へ來り勘平と出合て然も嬉しげに柴々物語りそるにぞ幸助扨こそと思ひ遠くより其少女

を見遣けるに花の顏せ月の眉實に絶世の美人にして衣通姫小野小町も斯やあらんと思はれけれバ暫時イみ見取て在しが見付られては如何なりと傍の薄に身を隱ち聞耳立て居りし內に勘平お勝の兩人い右と左へ分れしのば幸助熟々お勝を羨ましく思ひ何卒手段を運らして彼女を我手に入んものと心に兆を煩惱の犬い追ども立去ず然れど良き思案も出ざればよし〳〵翌夕こそ兩人が立別れ歸る其處を女を捕へて口說ん者と思ひ定めて先其夜い假屋を指て歸りける斯て翌曉幸助早くも身支度をなし又此處へ來りて見れば勘平既に來り居て暫く彼の少女を相待居たるに今宵い如何しけん待ど暮せど彼の少女影だに見ねば幸助も氣ばかり焦ち居たる折柄西の方よりやつと來れば大ひに悅び容子何にと見て在に勘平少女に打向ひ何故今宵は遲かりしと問ば少女今宵い家內の者早ふ寢もして人目の關に遮られ夫ゆゑ斯樣に遲くなり候定し君の御待わびと心い彌猛に逸れ共外を備なく苦しき心を堪へ居候必ず惡く思召そなと言ふ其言葉の終らぬに勘平ひしと抱き付き暫し談話も絶たりける幸助い此休を見て彌よ戀慕の心堪へ難く現をぬかして見居たる處に勘平お勝ゑ別れを諭し夜明なば人も知べしィサ諸共に歸り申さん疾々と勸むる言葉にお勝も是非なく立去しかば勘平も假屋へ急て歸りける然程に幸助い少女の後を慕ひ行き頓て近付聲をかけ我い太閤秀吉公の家來加藤幸助と云者なり今宵川狩をして今歸る處思いぞ貴女に避逅て花顏柳姿に氣を奪ひも身に添ぞ可憐假の情有れかしと抱き付しをれ勝い手早く振放し妾い母の病氣に因り未曾を願はん其爲に神詣でして只今歸る所なれば何卒許容してたび給へといへ共幸助いつかお聞き歎り給ふと勿れ神詣でそるならば何故寢衣の儘にてい出られしぞ察そるに忍び逢ふ

戀人や有んと疾々言ねと責付しにお勝不然さやうのとい夢にも存せぎ全く母の病氣の爲神詣でを致せしなり其所退て許容されよと云に幸助聲荒らげ貴女然樣に陳ずる共其懇人い我よく知れり欺き給ふころ淺慕なれ此處より外へは遣まし是非とも望みを遂んぎとて既に斯と見ぬければお勝コ、所詮遁れぬ場とは思ひけれ共何とかして此場の危急を逃れん者とて成程御推量の通りにい侯へ共善ー より其人を好みてのことに非ず義理に逼られ餘儀なく隨ひ候なり然る間其人の手さへ切て妨げよ爲ぎ者候いねば貴郎に從ひ候とて何苦しからぬ儀に候へど其人の居る内い御心情に隨ひ難し欺りい申さずアラ可愛の主よなう何卒其内能き御返事をと云捨しまゝ足を早めて遁出しけるに幸助元來女子に逢ふては正体も無き程の者なる故偽らるゝとい露しらぎ今女の言にては勘平さへ無ば我に隨はんと必定なり幸ひ我未だ妻も無しよし然ば勘平に出逢ひ眞劍の勝負をして女を早く我手よ入んと思ひしが又思ひ返し否々彼は手の内勝れし者なり容易く勝負しては叶ふまじ夫よりは彼女を奪ひ取り何國へ成とも立退んこそ好かるべし然ながら我今此處と立退ば母の難儀何許ならん夫も又忍びざるなり抔と種々に考へしが屹度心を定め所詮欺し討して本望遂るには如ざるなり明の晩をば過すまじ然なりゝと獨り點頭爰に害心を生せしかど是も同じく身を亡ぼぎ種とは成にけれ實にや人若き時い誠しむると色に在と幸助い前後の辨へも有やなく僅か一人の勝女が媚に曲れる心を爰に起し遂に誠しめを打破り殘忍所業に及べんと爲ると淺猿くも又恐ろしけれ其習日は幸助宵の中より身支度を調へ蹤ての場所へ赴ぎて勘平が來るを今や遅しと待掛たるに神ならぬ身の是非もなく勘平斯とい夢にも知ぎ例の如く涼みながら團扇抔使て淀川の流れ清きを打見遣ぶらり〳〵と此方を指て來る處に後の方より誰やらん足摺するよと思ふ間もなく一刀の秋水閃めくや否や肩先目掛て大袈裟掛に切付しにぞ勘平是はと身を開くに早四五寸許り切込れたり勘平振返り見てコハ幸助已れ何の意趣有て欺し討をば掛たるぞ何故尋常にい勝負せざる卑怯き汝が振舞かなと云樣此方よりも切付しが然ども肩先の重傷に腕利ぎ其内一の太刀を切掛られ流石の勘平も既に仆れんと爲けるが必死を極め再び太刀を合せつゝ一上一下と火花を散して切結ぶ斯る所へお勝何必なく來りし所今此体なるを見て大いに驚き如何いせんと思へ共小刀一本も手に持ざれば何と爲べき樣もなく只途方に暮て居たりし内遂に勘平切伏られて其場へドッと仆れたりお勝は口惜き限りなく我を忘れて幸助が腕目掛て噛付しに幸助お勝を小脇に抱込み見付られては大事なりとて勘平の絶息刀をも刺ぎ只一目散に何所ともなく落行ける

○飯沼勘平遺言の事　幷　遺子初五郎復讐を望む事

此こと忽ち其筋へ聞にしかば翌日檢視として生松五郎兵衛桂万兵衛と云る兩人此處へ來り切伏られし者を見るに飯沼勘平數ヶ所の傷を負て臥居ければ大いに驚き然ど未だ息少し有けれゞ其儘戸板に乘て奉行片桐が前へ差出したる處市正自身に介抱して仔細を尋るに勘平眼を見開き苦し氣なる聲を出し某し夜前淀川の邊りへ涼みに參りし處後より何者とも知れず肩先へ切付しに因り振顧り見れば加藤幸助にてい何の意趣にて斯の如くなるやと尋ねけれ共何とも答へ申さぎ然に因り某しも幸助に渡り合左の耳より肩へ掛て切付申いわはれ此上は片桐殿の御贔屓を蒙り悴にてい今年十三歳になる初五郎に讐を復させ給いらば武士道

も相立之に過たる御恩これ無いは是ぞ今生の願ひにていと述ければ市正委細と打聞給ひ其儀は少しも氣遣ひ給ふな我主君に宜敷願ひ得さそべしと有しかバ拙平莞爾と打笑ひ今に始めぬ君の御芳志辱け無くこそ存ぜるなれ早々思ひ置といはゞ此儀許りが願ひなりと云て三十三を一期とおもし歸らぬ旅にぞ赴きける斯て市正太閤の御前へ出此由委細言上に及びし處太閤甚だ御立腹在々惡き加藤が仕業かな其儀ならば仕樣こそ有ん先兎も角も彼が屋敷へ知らせ遣はすべしと有ければ即ち飯沼が方へ知らせし處妻は聞て卿天し餘りのことに能ふ泣もせず只茫然として在ければ家來谷十次兵衛と云者之を諫め殿が御事い早ヤても詮これ無く此上は御一子初五郎樣御座いなれば拙者御後見ヤして復讐仕らつん然ば一刻も早く此儀御上へ御願ひ立然るべくいと申そに妻も此諫めを聞て少し心を取直しけれ共初五郎切て十五六歳よても有ならば然のみ氣遣にも思はねど何を言にも年の行ぬに困るなりと打歎き居たる其所へ初五郎直と進み出母樣然のみ歎かせ給ふな見小腕にはいへど父上が讐加藤幸助何其儘にして置べきや恨みの刀思ひ知らして父樣が法の手向よ爲ヤさんと云バ谷十次兵衛大いに悅び石流い飯沼家の令郎梅檀は二葉より芳バし誠に驚き入ていなり讐を復に及や腕は線之もの只々一心の劍金鐵の如くにていへば假令敵手鬼神の如しと雖も何難きといべきや母堂樣必らず歎かせ給ふべからず某し當年耳煩の坂を超ると雖も其昔し先君に從ひ諸々の軍に大功を顯せし谷十次兵衛にて候へば率是とりお上へ願ひ暫時に讐加藤幸助が首提げ來らん初五郎樣御支度有とサモ勇み立て述たりしい天晴忠臣とこそ見ににけれ

○秀吉公左文字の一刀を初五郎に下し賜る事　幷　初五郎十次兵衛讐復首途の事

然程に初五郎十次兵衛に伴はれ太閤の御前へ出亡父が仇を報じ度旨願ひし所太閤一々聞し召尤ともの願ひなるが初五郎當年何歳に成ヤ十次兵衛十二歳に成申候太閤然らば後見の者有ヤ十次兵衛初五郎未だ幼年に候間拙者後見の必得に御座候太閤然る上は隨分堅固にして首尾能討課そべし勘平は所々の合戰に軍功を顯し適れなる勇士なり去が成らざることにて命を果せし條殘念にて有し早く父が仇を報じ本國へ立歸るべし其時先知い相違なく與行べしと有て御手づから金子幷に左文字の一刀を下されしかば初五郎主從有難しと御禮申て頂戴し頓て御前を退出して夫より片桐の屋敷へ行き且元に對面して敵討の印書を乞ける所且元頓に肯ひて直樣

太閤秀吉公の御旗本飯沼初五郎元治家士谷十次兵衛を召連れ親の讐加藤幸助を討んと首途に及び候條勝負の儀宜敷賴入候讐首尾能討候上は早々本國へ送り歸さる可者ん

天正十二年七月　　片桐東市正判

右の通り認め渡しければ兩人受て屋敷へ立歸り斯る上い一日も早く打立べしとて早速用意に及び頓て吉日を撰び來る廿五日こそ宜しからんとて乃ち此日を首途と定め信當日よ成ければ初五郎母と離別の盃盞取替しけるに母い泪に暮乍ら隨分無事にて本望を遂げ目出度歸參を致さるべし是許りが樂しみぞと暇乞そる言の葉に流石初五郎も堪かねて思い寸涙に沈みければ十次兵衛之と諫め目出度御首途に臨ませ乍ら女々敷御振舞こそ心得ぎは早疾々と勸めし程に初五郎名殘い更に盡ねども勇士の十次兵衛に氣を引立られ頓て兩人何國を目途と定めも無く旅の空母に別れて出行ける

母親の歎きも道理なれど十次兵衛の忠義察し遣れて可哀なり未だ年端も行ぬ初五郎を預り氣こそ壯健なれ老の身の行末如何と案じらるゝ口に言ねど内心に是を氣遣ひ彼を思ひ二つにゝ母の歎きを思ひ遣る抔餘所の見る目も痛はしけれ然ば大閤にも深く御憐みを垂させ給ひて扶助米等下され悴が歸りを待べしと最と有難き御意を下され又幸助が母は門前拂ひに成れしとかや

扨も又加藤幸助ゝ奈良ゝ少しの由縁有ば先其處へ便り行暫くは此處に身を匿し居んと思ひお勝を肩に荷ぎし儘行々松原迄來りし所早夜も白々と明け渡るにぞ幸助お勝を肩より下し和主が昨日の朝云た通り勘平は我手に懸て討取たり然る上ゝ最早心に懸ると有なじ疑てはは我是より奈良に赴き由縁の者の方へ立越て其上兎も角もせんと思ふなり悦び有やノウお勝といやみに脊を叩きければお勝之を聞て何と返答もなく許り間を伺ひ逃んとすれば幸助驚き引止め這ゝ开も何と働らきける大反女逃んと爲とも何逃そべき何れへ行とて斯逃出せしぞ疾々言ねと迫りしかばお勝無念の齒噛を爲けれ共斯る大惡人と有上からは無益逆らひ事言も甲斐有まじ夫のみならず殺されんと疑ひなしと思へば憎き大惡人戀人の恨み一刀なり共報ゝで暗々討る可と思ふ心を押匿し成程和君の仰の通り今は更々心に懸る雲もはねば此上ゝ兎にも角にも能に計らひ給ひねかしと云に幸助怒りを治め然ばと云て二人連立先ゝ立後に爲つゝ行道々もお勝幸助を口惜く思ひ且又今宵奈良の宿へ連行かれなゞ無体に戀慕をも仕掛られなん然とて何渠が爲に身を汚さんやなどと思案を定めながら心とも無く行處に爰は所も闇り峠道さへ細き山間に樹木は森々と生茂りて晝猶闇きゝ山の名にそむかぬ一

方は谷深くして覗くと爲れど匂々に底も見ねざる此處へ差掛りたる其時しも流石女性の淺墓心此處にて本望を遂せん者とて後より幸助が足を取と其儘谷へ引落さんと爲けれ共大兵の幸助爭て女の小腕に引落さるべき一すも動かぜ何をそるぞと回顧る所をお勝幸助が差添を引抜き眉間を目掛て切付ければ幸助微り僞を負ひ乍らお勝が小腕を確と執へコリャ汝れ何とかそる何とか爲とは大惡人二世を契りし戀人の勘平殿と手に掛たる貴樣が憎しと思ふ戀令切付し一刀ころ切て戀人への手向なり最早我命惜からぜ勝手に爲れと云ながら身を悶ね齒を噛戀無念の眼に血を注ぎ幸助を發打と睥睨しかゞ幸助是を見て扨は汝れ昨日云しとは欺りよな斯とは知らず誠と思ひ勘平を殺し我も難儀の身と成しこそ殘念なれ思へば憎き女め可愛さ餘りて憎さ百倍イザ殘忍目見せて呉んぜとて林の中へ引摺り行なぶり殺しの慘酷しさお勝は苦しき聲を上げ假令爰にて殺さるゝ共魂は此土に止まつて和君に憂目を見せんぞと云つゝ遂に狂ひ回りて死したりける夫より幸助は血を押拭ひ南都春日の社家へ尋ね行暫時は茲に居たりけれ共永くは茲にも居難く去て夫より奥州の兄半太夫が許へ立越んと思ひ頓て奥州路指てぞ急ぎける

多田野の里なる勝女が家にてはお勝が歸り來らざるに依て所々尋ぬれども知れず然るに翌日闇り峠に女の死骸ある由聞傳へ尋ね行て見し處果してお勝が死骸朱に染て有けれゞ大いに驚き殺せし者誰なるかは知れざれ共早速其筋へ願ひて死骸を申受最厚く弔ひを爲けるとなり多田野の里と云は今の大仁村なりしとぞ

○初五郎主從奥州へ行事　幷　十次兵衛川水に溺るゝ事

然る程に初五郎十次兵衛の両人思ひ運らすに船路の勝手宜ければ譬は必定中國へ下りつらん先手始に其國々を尋ね可しとて乃ち備前岡山へと赴むき夫より備前備中を樣々尋ねけれ共手懸りなし兎角そる内に其年も立又翌年も過去て初五郎既に十五歳と成たりをが早三年も諸々方々を尋ね歩きしに因て太閤より賜ハりし金子も殘り少なに費ひ果・其上十次兵衛不圖煩ひ出しければ困難云ん方なく然れども初五郎撓みなく看病せしに因て日數六十日程過て漸々十次兵衛の病氣本復に及びける扨十次兵衛申そ樣幸助は早備前備中にも居らざると覺ゆ候なり承まはれば彼が兄某しなる者奥州白河の邊に居るとのことに付彼も亦奥州へ參り居らんも知れ申さず夫に就ては只今より奥州へ御供致さんと存ぜるなれ共路用に事を欠き難退谷りて候程に御痛はしくは候へ共召る御衣類を只今賣却なし夫を以て彼地へ赴かんと存じ候許させ給へ是も亦御父への御奉公某しも亦斯の如くよ候なりとて頓て初五郎と自分の衣類を一纏めにし遂に之を賣譽なして路用を整へ頃は十月の寒空に主從二人肌も薄者の憂き旅を野に伏し山に寢あがら行々既に奥州へ早二日路と言ふ處まで到りし處其日の夕がた有る川の邊に出しかば主從此處に一宿せんと爲たりしが兎まれ向ふの岸へ打越んとて夫より兩人手に手を取て渡りし處思はぜ十次兵衛足を踏外し深みへ突と横樣に倒れしにぞ初五郎是はと驚き慌てながらに抱き上げ辛ふして向ふの岸へと上りたり斯て初五郎十次兵衛を樣々介抱けれども息も絶々にて其上着たるものも浸と濡ければ匆々物をも云ず初五郎もはと〳〵當惑なし暫らくは途方に暮て居たりし處其傍遥よ荒家一軒有ければ是幸ひと思ひ其所まで十次兵衛を荷ぎ行表より戸を敲きて我々は旅の者なるが老人前なる用へ溺れ既

に命も危ふき間何卒内へ入れ火に煖て給はるべし生々世々の御厚恩なり玆明てたべと云ければ主の老人立出て是は〳〵氣の毒なることなりシテ其老人は何方に居給ふ是へ連て來らるべしサア〳〵是へと肯ひしかば初五郎やつと生たる心地なし臥たる十次兵衛を抱へ行んと爲しけれ共流石小腕の哀しさ勿々揚らぜ主人の老人を頼みて漸々荒家へと擔ひ入れ夫より老人藁を焚て十次兵衛を煖めしかば是に因て十次兵衛少し正氣づきたり良有て十次兵衛サモ苦し氣なる顔をなし初五郎を熟々見涙を流して申樣最惜や若且那足はぬ乍ら此十次兵衛を杖とも柱とも思されしに何ある武運の盡果しよや十次兵衛早此處にて相果べし御歎き有んとい察しけれ共是も宿世の緣し成ば何程謂ても甲斐有まじ就ては此上御堅固にて樂に廻り逢給ハゞ首尾能討て亡君の鬱憤晴し給ふべし私し此處にて死そる共必らず御氣を緩ませ給ふな此儀計りがれ願ひなりと言聲も早微なるにぞ聞居たる初五郎顔をも得上ぜ伏居たりしが流石未練よ泣もやられぜ苦しき胸を押鎭め我大坂を出しより今日今迄も頼みとせしは只其方一人なり然るに今其方に別れてハ何とせん我また斯る年弱と云へ譬の行方も知れぬ内別るゝとの哀しけれと言ば十次兵衛押返ぜて道ハ言甲斐なきと曰ふ者かな偖は此十次兵衛居らざれば譬は討ぬと覺しけるのか郎君も飯沼家の若君ならぜや武士に似合ぬ其御一言斯の卑怯の御量見なら十次兵衛今より主從の御緣を切申さんと息を喘々申ければ初五郎打點頭成程尤もの一言なり假令幸助何國如何なる處に居とも探し出して討負さんと言聲問て十次兵衛覺ゆず手を上初五郎樣夫でこそ飯沼氏の御子息なりと言かと思へば心の撓みに其儘息ハ絶たりける初五郎ハ死骸に取付悲歎の泪に暮ければ主の老人之を慰め御歎さい然る

となれ共何日迄言ても歸らぬ事此上い遺骸を少も早く埋め申跡念頃に弔ふこそ宜れとて家の裏の地面へ埋たりしい聞も哀れのとどもなり

○老人初五郎へ衣類を惠む事　幷　初五郎九十九新左衛門の家へ奉公に住込事

斯て老人は十次兵衛が亡骸を取片付夫より初五郎の濡たる袷を脱せ薪火を焚て之を乾かし又粥を煮進めなどして樣々に待遇けれバ初五郎は限なく悦び御情何時の世にかは忘れ申さん我は先刻より御聞の通り敵を覘ふ者なれば押付け本望遂せし上は其節御禮申々返す〳〵も辱けなしと厚く禮をば述了り其夜は經を讀誦して寢も遣ぜに打過ぬ翌日と相なり初五郎主に別れを告ければ老人泪を押拭ひ長の御旅と言ひ行衛も定かに在ねば今一日の御逗留あれ然程御急ぎにい及ぶまじ是非にと言ふ初五郎い其御芳志い有難けれど一日も早く讐人ゑ回り逢たく存ぜれば早御暇を申べし御禮の程は勿々に只今茲にでは盡し難し然らばと言ば老人も詮方なく〳〵古單衣を取出し貴殿殊の外に薄着なり風引れてい成候まじ爲米乍らも是なと餞別に差上べし首尾よく御讐討の其時までも愚老若世に存在居らば再び御目に掛り申さん然ば隨分御壯健でと思ひ込だる挨拶に初五郎も嬉し涙にむせびつゝ勇み立てぞ出行ける然るに初五郎十次兵衛に相訣れ心細く〳〵も道を辿りて過行共何處に緣家の有にも非ぜ又懇意の者とても有ざれば如何はせんと種々思案を回らし乍ら既に奥州路へ入り白河の近邊へ到着しければ道端の菓物など商賣してある店へ立寄て私しは稼せんとて尾張國より遙々當地へは參りし者なり然る處緣家もなく懇意の者も候はねば近頃押付の願ひなれぜ何卒奉公口の御世話下されたし此事偏に願ひ候と腰を屈めて申けれバ主聞て扨々此お人は仕合者なり我等出入の旦那なるが兵法の師範を成さる九十九新左衛門樣と言御方あり恰ぜ此御家にて此節草履取を御尋ねなれば是へ早速御目見に遣申さん御首尾の上は此方にて親判すれど判代少々申請たし念の爲なれば始めよ申なり御承知なるやと言ければ初五郎是は御念入のと如何にも承知致し候何程にても苦しからず兎も角も御取成願ふなり主人左樣ならば一刻も速く遣申さん然ばと言て夫より髪等結せ頓て同道して遣けるに幸ひ新左衛門在宿にて初五郎を見汝は何國の生れにて年は何歳なるやと問けるに初五郎私しは尾張國の生れにて年は十五歳に成申候と答ふ新左衛門能き者なり先々置て見ん隨分出精せべしと有けれバ初五郎有難く候と申て乃ち新左衛門が方に止りける斯て新左衛門初五郎をば八助と呼せ草履取を勤めさせけるが初五郎元來才發の者故主人を始め家内の者までにも氣に入れ諸事油斷なく働き居て師範の家なれば若も幸助の入來るともやと常に心を付て居たれ共似たる者さへ來らぜ然ど心の中に斯く多人數入込あれば其内出會も知るべからぜ此家に辛抱して居るこそ好らめと思ひしかば彌よ勤めを勵み夜に及べば我部屋に入て亡父尚平並に十次兵衛へ手向の經など誦一居ける心の内こそ神妙なれ然るに初五郎生れ付ての美男と言殊に年も未十五歳の若衆作りにて有ければ今年十四歳になる新左衛門が娘かよと言者不圖初五郎に想を掛いと淺からぬとゑい思ひしが流石に年の行ざれば然明白にも言出し兼一人胸を焦して居たりし内早其年も暮翌れば天正十五年かよ當年三五の春を迎へしかバ切ては思ひの端なり共知らせて欲と思ひ詰め或日何やらを認め人知れぜ初五郎が部屋へ入置たりしに初五郎部屋へ立歸り見れば艶書と覺しく上書に八助殿へかよよりと手跡も美事に認め有ばコ

ハ如何にと不審ながらも聞きて見るに

君が住邊りの草になどしてよ見せばや袖に餘る白露

と有けれ共初五郎心に思ふ仔細も有ば兎角知らぬ顔して捨置ぬ然る處又々一兩日過て思ひの丈を細々と認め送りしが是も亦其儘にして置し處おかよ斯迄心を示しても返事なさこそ口惜けれ此上は押付て行んオヽ然と娘め心の只一筋に或夜家内の寢息を覗ひ忍び出て初五郎が部屋へと行し心こそ又憎からぬ思われけれ

丼 初五郎おかよを賺す事

○九十九が妻娘の樣子を立聞する事

然程に娘おかよは誰を頼むべき者もなく直に口説ん者と夜に紛れて初五郎が部屋の戸を竊と開け其儘側へ走り寄是八助よと搖り起せば初五郎ハ起上り是は〳〵御嬢樣何故夜中に見苦しき此部屋へハ御出有しぞ早々御歸り遊ばせと云ばおかよハ涙ぐみ何の故とは夫やり聞ねぬ是迄數多の文送りしに只の一度の返事もなく其上今の其一言情あいぞよ恨しヽ女の身として恥しくも斯して來たのに何として其儘直に歸らりよかヤヨ八助と云ながら取付縋りて放さねば初五郎ハ容を正し見る影もなき下郎めを然程に思し召下さると身に取り添けなくハ候へ共然乍ら此身には些思ふ仔細の候て今ハ心に任せざれば何卒潔然思ひ切せて給はれかし何卒〳〵と云ければおかよは猶も摺寄て女の口から言ひ出し今更斯と云るゝならば所詮我身は是迄なりと泣出しけるに初五郎も持餘し然程に思召し給はらば又何とかの思案も致さん先々今宵ハ御歸りあれと漸々其場を取成て寐所へころハ歸りける然るに其翌晩も來りし處に母ハ疾くも斯と知り跡より付て部屋の戸口へ耳を寄せ樣子如何にと聞居たるに

娘は此事夢にも知ず初五郎に打向ひ夜前那程までに口説ども返事のなさこそ情なけれ今宵ハ色よき返事をと云に初五郎膝立直し斯樣のと且那樣へ聞なば吾身計りか御前樣にも御難儀あらん壁にも耳と譬も候へば早々御歸りなさるべし此儀ハ迚も叶ひ申さぬ早ふ〳〵と憑立ければおかよは泣々居直りて仮令嚴父の御耳に入如何なる憂目に逢ふ迚も其方故ならば厭ひはせじ吾身を憎しと思われなば寧そ手に掛殺して給更々怨には存せぬなりと云れて初五郎ハ是ハ勿体なき事仰せらるゝ者かな御前樣を手に掛殺し夫で此身ハ何としませふ此儀ハ御免下さるべしと云其聲の下よりもおかよハ劍懐と取出し然てハお前を頼みハせぬ父樣母樣許して給南無阿彌陀佛と稱へつゝ既に斯よと見ゆけるにぞ初五郎慌て押止め然程に迚も思し召御事なら今宵ハ夜も早更候程に明晩御出なさるべし必らぞ相違ハ致そまじと聞ておかよハ欺かるゝとハ心付かぞ然ば明晩是非〳〵と約束堅めて歸りける母ハ始終を聞終り見付られてハ憑かりなんとて忍び〳〵に寢所へとてそハ入にけれ

丼 おかよが母八助を聟養子に望む事

○おかよ思ひ煩ひの事

去程に初五郎思ふ樣令娘が志ざしは嬉しけれど譬と覘ふ此身として猥りのとは最初よりせまじと心願立し程あれば夜前は漸と賺して歸したれど今宵ハ何と言ひ紛らさん兎やせん角やと思案を爲して居たりしが宜し〳〵今宵ハ部屋の戸を堅く鎖し出會ざる樣なそべしと必強くも其夜は堅く戸を鎖して居たる所娘は斯とも知らずして日暮を待かねて既に部屋へと行見ればコハ如何に押ど敲けど明ば社内を覗きければ燈も消て闇かりし程に詮方なくも其夜は寢所へ立歸りける偖翌晩になり又々至り見る處今宵も夜前の通り閉しく閉て在しかば

おかよは偖は八助に欺されしかと悲歎の泪に心も乱れ其夜も悄乎我寢所へとゝろ歸りしが是よりしては唯鬱々として煩らひつき食物さへも食べざるにぞ双親は大いに驚き早速醫師と頼み種々療治をさせけれども療治の効は少しも見にゝ猶も次第〳〵に衰へて今は醫師の手術も盡しに因り母親の歎き一方ならゝ種々に思案を運らし或日夫新左衛門に打對ひ妾少々御願ひ有り御聞届け下さるやと問れて新左衛門是はまた改まりたる申とかなゝ其願ひとは何事なるや疾言ふべしと有ければ妻は別の事にも候はゝ實は娘かよのことにて候病氣の樣を熟々見申そに勿々常体の病とは得こそ思はれ申さず妾先つ頃より心を付て居りし處娘の病氣全くは八助に懸想なし言寄ると雖ども八助之を聞入申さゝ夫故想ひ焦れて出し病と存じ候就ては賤しき者との御蔑視も有可れゝ何卒渠を娘の養子とせられ此九十九家を渠に御繼せ下さる樣此儀吳々の御願ひにて候然候時は娘の病氣早速平癒なゝ耳ならゝ妾存ぜ候に八助とて木石にも候はず然るに身を謹み斯も心を固く用ひ居ると是見所ある者と覺ゆ候又親の慾目かは存せねゝ此近邊に娘數多ある其中にものよに勝れし者有とも覺ゆ申さず殊よ一人娘のことにも候へば迎ものと渠が氣に入し者を聟に取せ度存じ候へば此儀御承知たまはれかしと娘を思ひ家名を思ひて申けれゝ新左衛門之を聞何樣娘が八助を慕ひ居るとのとゝ我も疾知れり又八助が人品を見るよ賤しき者に非ず其上弟子どもの對手を爲して試るに適れなる手の内渠自身尾州の百姓といへ共決して然には非ざるべし此家の聟に取て不足なき者なり幸ひ明後日は松前氏の試合に付門弟と殘らゝ遣はし我も亦夫へ參る間其後にて八助へ右の由を申聞せ先内祝言を取結ぶべし夫々への披露は追て吉日を撰み沙汰なさん兎も

角も内祝言然るべし道理なりと承知しければ母い大いに悅び早速の御得心有がたく存ぜ候然樣ならば娘へ先早く申聞せんとて夫より娘のもとへ行斯樣〳〵なりと申ければおかよ此一言を聞より顏色頓に直り霜の朝日に解るが如く瞬く間に氣分豁然と開けしかば早速に病床を立出其日遲しと待居たるに程なく當日に成ける故母も娘も勇み立髮を結び浴をあし其内に早日も暮て新左衛門松前氏へ行しかば母い下嬶へ申付諸事萬端の用意を調ひさせ夫より娘へも白小袖を着せ母も衣服を相更め最美しく出立たるにぞ初五郎此体を見て何とも合點行ぎ居たりし處奥より八助殿御召なりと聲掛られ何事ならんと出行しに娘い白小袖よて綿帽子を戴き上座に直り母も衣服を改め其中に坐り其外島蟲銚子など飾り有ければ初五郎不審更に晴ぎ未座に蹲まりて御用の儀はと聞ければ母言辭を正し八助殿近ふ寄べし苦しからぎ偖斯樣の形容嘸不思議にも思ふらんが旦那樣其方が心を御見拔有て其方を今宵娘かよの養子と爲らるゝ由御申付故今晩其方と内祝言を致さそるなり夫々への披露い用て吉日を撰み取行なふなれば近よつて娘と祝言の盃致さるべし斯申そも其方い謹み深く娘が心の切なるをも避て猥りのともあらず其上武術の手練と云ひ天晴なるとの御事にて幸ひこの家に男子なければ之に因ての御考へなり此上い娘と中睦しく九十九の家と相續し給はるべしいざ近くへと有ければ八助發と両手を付是い有難き仰なれ共由緣も未だ詳らかに申も上ぬ僕れを斯程に迄も御贔負下され九十九新左衛門樣と申てい人も知つたる御師範の貴き御家を何として我々如き下郎匹夫に繼せられんとは仰らるゝぞ憚り多し此義い御免下さるべしと申を母は打消して然ほど遠慮に及ぶ可らゝ此方より許して祝言致さするに違背い却て不

禮成べし早々祝言致さるべしと言聞されて初五郎思はず發と差俯き思案の体よて有しかば母い氣を急是八助疾々返事して給と迫詰られ詮方なくも初五郎頭を擡げ御意に背くには候はねど此身にい些思ふ仔細も候程に此事ばかりは御免をと申出せば母は訝りサア其仔細と い何事ぞ國元に言號にても有のかと云ば初五郎いコリヤ御無躰なる御尊かな思ひも寄ぬ其仰せと膝組直すを母は見遣り然らば此家を不足に思やるかと言顔を見て初五郎又しても勿体なき仰かな不足等とは何として然らば何故ニ、夫は夫とも何ぞ其身には此母娘の申とを女と侮ぞり云ぬと見ゆれぞ言ねば其方の爲惡し疾々言ねと急立ける

○新左衛門家に傳はる一刀を八助に渡せ事　幷　初五郎本心を語り奥州出立の事

此時初五郎少しも憶せず仔細如何にと仰有れども此儀ばかりは仮令一命を召るゝ共又何様の御責あるとも打明し難く候間何卒御用捨下さるべしと何度問ども同ぞと繰返し〳〵申にぞ母も今さら詮方盡き思案に暮て居たる折しも娘は手早く懐劍取出し既に自害と見ければ母は遽てゝ押止め短刀捻取膝立直し娘出かした然ながら未だ仔細も聞ぜして死そるい犬死同樣なり八助が心底を聞し上死も共遲きとには有まじ暫時は待てヤヨ娘よと言つゝ八助よ打向ひ今見る如く娘には其方が心次第にて死する覺悟をせしと見なたり仔細に依ては娘を殺せ共又生す共开は何れ共其方の隨意生根を居ろていざ返答をと言葉忙しく問ひける所へ頓て門の戸を押開き主人新左衛門衛と内に入り奥の座敷へ通りて見れば娘は俯伏し歎く体母は短刀を片手に持又八助は兩手を組何やら考へ居たりし有樣今黙行ぜと不審はなせども流石は物になれたる新左衛門笑を含みて申樣我今寄早くも踊るべかりし處振舞の宴に時

刻を移し今は去も歸りて見るに此体なりしは未だ後片附の出來ぬと見ゐたり勝手の者も嘸勞れん乞行て見んナウ妻と云つゝ立を妻は押止め暫し御待下さるべし良人にも疾御承知の通り今宵娘と八助の内祝言を結ばん爲萬端の手筈調ひし處八助一圓合點致さぬ斯樣〳〵恁々と有志仔細を物語れば新左衛門殘らず聞て打案じ八助一命に替ても語らぬと有上からい尋常のとにてハ語るまじョシ然ば我に一ッの考へ有と云つゝ一間へ入たりしが金作りの一刀を持いたし初五郎が前ょ置て偖申樣此一刀ハ先祖より傳いる九十九家の重寶系圖とも我が魂ひとも言物なり是と汝に與ふる間必らず麁忽に思ふ可らず疾受取れと有ければ八助不審ながらも忝けなしと押頂けば新左衛門重ねて言樣我今此刀を汝に讓りたれば我魂ひは即ち其方が魂ひなり然れば其方何樣申難き仔細あり共包まず語るべし必ず他言は致さず去率承まはらんと有ければ初五郎も其理に責られ成程御心を込られし御一言身に染み渡りて覺ゑ候一命に抱はる義なれ共今は何をか包み申さん然ば委細と申上んと容を更め實は私しと親の報讐を思ひ立十三歳の時本國を出身を謹み不淨を受ず魚肉も食せず只一心に本望を遂せん念願にて候此段御推察下さるべしと思ひ入て言ければ新左衛門は又聞やう然ば其方は何國の生れにて如何なる人の家來にや實の姓名は何とか申といへば初五郎は首を下げ父は秀吉公の御旗本飯沼勘平元勝と申一子同苗初五郎元治と申は某しなり以來然樣に御承知を と云ば新左衛門は扨こそと打驚き忽ち禮を厚くして申樣初より樣子有げとは思ひ居れ共斯樣の譯とは露知らず是迄盡せし不禮の段平ょ免して給はるべし然るに其初五郎殿何故我方へは來公なせしと仔細を疾々語り給へと問れて初五郎は然ばにて候讐は同じ殿下の御旗本

なる加藤幸助と申者にて是と尋ん其爲に頃は去ぬる十二年の七月家來十次兵衛と申を召具し國許を出夫より先備前岡山に居たりし處幸助の兄某しなる者遂此御近所に居ると言ふと知しかば去年十月岡山を出立なし既に奥州へ二日路と云時或山川を渡りし處十次兵衛過つて水に溺れ相果しかば是非なく所の賤が家へ立寄其家の老人の情にて遺骸は其處に葬りたれ共後ハ某し唯一人何處を便らん當もなく唯幸助が奥州に由緣有とのとに因夫を目當に此館へは奉公致せし其始終の艱難は言語に勿々盡し難きと委細を語れば新左衛門如何にも其方の推了通り其幸助といふハ我門弟加藤半太夫といふ者の實の弟の由にて先年此地へハ來りけれども此幸助と云者生れ付ての人非人にて兄半太夫が妻に戀慕を仕掛事顯れて人に評判を立られ是が爲當國を逐電せしかば早東國へ足を向る事有べからず今ハ其方往昔此處に居給ふ共本望遂そと叶ふまじ今暫くハ留め申さん心なれ共其方が大事を聞上は留め申も如何なり疾爰を打立て目出度讐を討給はゞ其時娘が望みをも叶へて下され此事頼み申なりと云ば初五郎ハ打點頭斯て日數を送り居ると亡父への不孝此上なし然ば仰に隨ひて直樣出立申さんと頓て支度を調へしかば新左衛門夫婦娘まで名殘ハ盡ねど言葉を揃へ然ば隨分首尾よくと云し中にも新左衛門ハ金子五兩と刀一振取出し是ハす志の贈けなりと渡せば初五郎押戴き成程本望遂そる上ハ御息女おかよどのを妻に申受ん必らず吉右左御待われ武士の一言違ひハせじと云ふ聲も亦勇ましければ娘の悦び大方ならず暑さも増る夏の旅隨分御心付らるべきと言つゝ所持の藥入を取出し裏に手早く一首の歌を書添ける

別れても必ひとつの旅衣幾重かさねて山路行けん

初五郎是を請取悦び勇んで出行ける

○初五郎白坂の宿にて熱病を煩ふ事　幷　初五郎蓄への路用を藥價に遣果さず

既に飯沼初五郎ハ九十九が舘を首途なし夫より相州小田原に少しの知音あるを便りに先小田原へ赴かんと思ひけるが道にて人目に掛らんとを恐れ太閤より拜領の刀と九十九に貰ひし刀とを澁紙包にして脊負腰にハ只自分の一刀を横たへ陸の奥山又山を打越て早下野の境なる白坂宿と言ふに着ければ初五郎ハ此宿に泊りしが如何爲しけん其夜俄うに大熱を發し苦しみ悶へ家内を狂ひ回りしかば亭主驚き一人旅の者死なれてハ難儀なりとて早速醫師を呼び見せし處醫師ハ診て是大傷寒なり先々藥を與へんと夫より百般に手當を盡しけれども効なく翌日になり翌々日に成ても飲食さへ咽へ通らず其内段々日數を經熱ハ少し覺けれ共肉落て骨と皮計りに成しゝば今ハ兩便とも自身にて行くと叶はねば醫師ハ此上ハ人參を用ひずば命も危ふかるべしと云に亭主ハ命さへ助る儀ならば人參なりとも苦しからず見ればこの人ハ由緒も有樣なり人參の二兩や三兩費す共不都合の儀ハ無るべし然ば其如くせんとて夫より人參を取寄飲せけるに流石年若の者人參の効に因て日に增し快氣しけれども何分大病にて有し故未だ飲食充分ならぬ漸々日數六十日程過て稍快氣に趣きしかば亭主ハ初五郎が臥褥に來り偖此度ハ手强き傷寒を煩らはれ嘸難儀成れしならん偖御病氣に付てハ藥も多分に用ひ又人參をも進らせしが貴殿旅を掛ての事なれば餘金の御持合せもあるまじけれど一應ハ御聞申なりと云れて初五郎は面目なげに何樣推察の如く大金ハ所持致さぬ然り乍ら今爰に少しの持合せ有ば不足ながら是にて宜しく取計らひ給はるべしと云て新左衛門より

貰ひし五兩の金子を出しければ亭主ハさらば先是丈御貰ひ申不足の處ハ何とか致さん何れ又後程と云捨て其場を立去り頓て醫師其外藥種屋等と呼び集め扨病人と斯樣〳〵の次第なりと段々のことを言て涙ひし處元來此亭主慈悲深くして平生人にも能く思ハれ居ければ皆々も心能承知し一言の異議言ふ者も有ざりしにより亭主は乃はち初五郎に斯と告しかば初五郎は亭主に厚く禮を述べ頓て其家を立出ける

○初五郎下野路にて蹟へとなる事　幷　百姓喜助親切の事

然るに初五郎六十日餘りの煩ひなれゝ歩行も心に任せぬ三町行ては休み其上病氣に因て路用も皆遣ひ果しければ道々も人の門に立て食をこなどし漸々一日に二里か三里つゝと歩みて辛くも三日路程來りし處俄かに腰痛みて難儀しければ道端の大木に腰うち掛て稍一時計りも休み夫より杖に縋りて立んと爲にコハ何とか爲けん腰より下一向に冷て立事叶はぬ因て又暫く休み又立んとすれど足に覺に有ざるゆゑ更に動くとも相成ねゝ初五郎是ハ哀しき哉何とて斯樣に難儀するかと身を採頻りに急りけれ共足は益を冷痛れ遂に黄昏迄も癒ざりしにぞ餘儀なく此處に一夜を明しける扨翌朝になり村の百姓通り掛りさ是を見て不思議に思ひ側へ寄り如何せしぞと尋ぬれば初五郎私しとは奥州より相模の小田原へ行者にて候が堺の明神(白坂宿)にて傷寒を煩ひ六十日計り絶食なし漸々此間肥日是迄參りしかぞも病後の故か一向足冷て起と能はず是に因て一夜を此處にて明し候と涙ながらに申ければ百姓之を聞き見ばまだ年若の身を以て夫は誠に不便のことなり憫然の体にて有し抔と云ける其中にも喜助と云ふ者申樣夫は病後に野宿を爲し故あらん然ば先此處にて養生

致し本復の上打立べし小屋よても作り與へんとて夫より喜助は諸人に勸め竹莚抔近所より取寄せ自身先立ちて假舍を結ひ先初五郎をば此へ止置夫より喜助は村中へ相談なし三度の食をも絶ぜ運び萬事に心を付親切に世話をなしけれども此處は米不自由にて餘儀なく常も稗計り宛行れしかば初五郎之を難儀に思ひ往來の旅人より一錢二錢の合力を貰ひ之にて子供等を賴み餅など買て食し居たりしが扨初五郎茲に居るとも既に二年を越ゑ當年天正十七年にして齡も早十八歳と成けれ共腰ハ未だ勿々に起き因て初五郎熟々思案するに譬ぬるとも當年にて早既に六年なり無事の身を以て諸國を經回りてさへ勿々に知れぬ者を斯く慰へと成てハ何時讐に回り逢ふとの有べき能々武運の盡たる我身かな親の讐をも討得ぜして徒爾ま烏兎を送らんと不孝是より大いなるはなし所詮存命て甲斐なき身なれば腹切て死んか然にても大坂に居給ふ母人には今日ハ首尾よく戻るか翌日ハ讐討て歸るかと待詫居さぞ給ふも歎かはし又二ッにはれかよ殿が斯と聞たらば嘸や本意なく覺すらん嗚呼我あからさまの思案に盡たり如何はせんと暫時は涙にかき暮しが又無常心の逼り來て母樣おかよ殿の歎きも然るとなるが寧そ此世を早ふなし冥土に赴き亡父へ御詫なさんこそ增ならんと思ひ出て は勿々に心もそゝろ早其日より村人の運びて呉る食物をさへ弗り斷て喰せざるにぞ村童等は此体を見て何心なく喜助の許へ告報せしのば喜助聞て不審に思ひ早速に初五郎の許へ相越し汝何かなれば食物を斷しやと問れて初五郎潸然として其御尋ねハ然るとながら僕れ御當所へ立越てより斯皆樣方の厚き御惠みを蒙ふれども然ど此病氣何時全快爲とも覺へ中さぞ一生斯の如くにては望みを達そるとも叶ふまじ然る時ハ皆樣方への御返禮も成難く生て

甲斐なき身なりせバ所詮一刻も早く餓死せんと夫を存じて斯は食を斷しとなれば切て死後は一遍の念佛稱へて下されたし假令此身ハ土に成とも御恩の程は忘れ申さぞ願ふは此事の外候はねど只幾重にも御許し下されと云ながら跡は涙に沈みけり喜助之を聞終りて成程尤も道理なれぞ一度死しては還らぬ者よ汝も未だ年若成れば癒らぬと云ふとも有まじ然る氣弱のと申さんより先々暫くは辛抱して其内少しにても癒りたら其時汝の盲ふ小田原とやらへ赴くべし死ぬなどいふとは呉々思ひ止れかしと最親切に慰めて喜助は我家へ歸りける

○初五郎車を惠まるゝ事　幷　加藤幸助伊勢參宮の事

斯て喜助村人を呼集めて相談なしけるは此頃聞に彼の躄への非人と永らく村人の世話に成を氣の毒に思ひ絶食して死んと思ひ定めし由なるが彼若も果なば代官所へも屆け其外理ひるとあど物入り掛るべき因ては寧ろ彼が無事なる中に幾許かの錢を持せ此村を拂ふこそ宜からんと思ふあり此儀如何やと問ければ一同の者も成程夫が宜からん然ながら錢を持せ遣るとは易けれど那の容にてハ追拂ふ手段有まじ如何して追拂ふやと云に喜助夫は堀小田原へ行たき望みの由なれば駕籠にては人も入に付渠が乘べき程の車を拵へ遣そべし足ハ利ねど腕ハ達者なる故棒にて押行くと自由なり世の譬にも佛千體作るより人の命を救へと盲然ば斯樣にして遣さば第一功德にも成銘々の爲にも宜るべしと理を說て聞せば一同も然ばと盲て承知せしにぞ喜助は早速に車を拵へ頓て初五郎が前へ曳行き是を見られよ上には雨露を防ぐ屋根もあり又押行棒も二本迄添て有ば汝が望む小田原ハ勿論京大坂長崎迄も此車にて押行時は自在なり是を今汝に遣はす間是に打乘り志ざそ小田原へ赴くべし何時まで斯し

致し本復の上打立べし小屋よても作り與へんとて夫より喜助は諸人に勸め竹莚抔近所より取寄せ自身先立ちて假舍を結ひ先初五郎をば此へ止置夫より喜助は村中へ相談なし三度の食をも絶ち運ひ萬事に心を付親切に世話をなしけれども此處は米不自由にて餘儀なく常も稗計り宛行れしかば初五郎之を難儀に思ひ往來の旅人より一錢二錢の合力を貰ひ之にて子供等を賴み餅など買て食し居たりしが扨初五郎茲に居ること既に二年を越ぬ當年天正十七年にして齡も早十八歳と成けれ共腰ハ未だ勿々に起き因て初五郎熟々思案するに譬ぬ るとも當年にて早既に六年なり無事の身を以て諸國を經回りてさへ勿々に知れぬ者を斯く覺へと成てハ何時譬に回り逢ふとの有べき能々武運の盡たる我身かな親の譬をも討得ぎして徒爾ま烏兎を送らんと不孝是より大いなるはなし所詮存命て甲斐なき身なれば腹切て死んか然にても大坂に居給ふ母人には今日ハ首尾よく戻るか翌日ハ譬討て歸るかと待詫居さ ぎ給ふも歎かはし又二ッにはれかよ殿が斯と聞たらば嘸や本意なく覺すらん嗚呼我あがら 思案に盡たり如何はせんと暫時は涙にくれ暮しが又無常心の逼り來て母樣おかよ殿の歎き も然るとなるが寧そ此世を早ふなし冥土に赴き亡父へ御詫なさんこそ增ならんと思ひ出て は勿々に心もそゝろ早其日より村人の運ひて呉る食物をさへ弗り斷て喰せざるにぞ村童等 は此体を見て何心なく喜助の許へ告報せしのば喜助聞て不審に思ひ早速に初五郎の許へ相 越し汝何かなれば食物を斷しやと問れて初五郎潸然として其御尋ねハ然るとながら俄れ御 當所へ立越てより斯皆樣方の厚き御惠みを蒙ふれども然ど此病氣何時全快爲とも覺へ中さ ぎ一生斯の如くにては望みを達そるとも叶ふまじ然る時ハ皆樣方への御返禮も成難く生て

甲斐なき身なりせバ所詮一刻も早く餓死せんと夫を存じて斯は食を斷しとなれば切て死後 は一遍の念佛稱へて下されたし假令此身ハ土に成とも御恩の程は忘れ申さぎ願ふは此事の 外候はねど只幾重にも御許し下されと云ながら跡は涙に沈みけり喜助之を聞終りて成程夫 も道理なれど一度死しては還らぬ者よ汝も未だ年若成れば癒らぬと云ふとも有まじ然る氣 弱のと申さんより先々暫くは辛抱して其内少しにても癒りたら其時汝の言ふ小田原とやら へ赴くべし死ぬなどゝいふとは呉々思ひ止れかしと最親切に慰めて喜助は我家へ歸りける

○初五郎車を惠まるゝ事　幷　加藤幸助伊勢參宮の事

斯て喜助村人を呼集めて相談なしけるは此頃聞に彼の譬への非人と永らく村人の世話に成 を氣の毒に思ひ絶食して死んと思ひ定めし由なるが彼若も果なば代官所へも届け其外埋む るとあど物入り掛るべき因ては寧ろ彼が無事なる中に幾許かの錢を持せ此村を拂ふこそ宜 からんと思ふあり此儀如何やと問ければ一同の者も成程夫が宜からん然ながら錢を持せ遣 るとは易けれど那の容にてハ退拂ふ手段有まじ如何して退拂ふやと云に喜助夫は渠小田原 へ行たき望みの由なれば駕籠にては人も入に付渠が乘べき程の車を拵へ遣そべし足ハ利ね ど腕ハ達者なる故棒にて押行くと自由なり世の譬にも佛千體作るより人の命を救へと言然 ば斯樣にして遣さば第一功德にも成銘々の爲にも宜るべしと理を說て聞せば一同も然ばと 言て承知せしにぞ喜助は早速に車を拵へ頓て初五郎が前へ曳行き是を見られよ上には雨露 を防ぐ屋根もあり又押行棒も二本迄添て有ば汝が望ひ小田原ハ勿論京大坂長崎迄も此車に て押行時は自在なり是を今汝に遣はす間是に打乘り志ざを小田原へ赴くべし何時まで斯し

て在も無憂事ならんと思ひ斯は計らひたり早速用意有べしと言れて初五郎は有がた涙に咽び入り御禮は言葉に勿々盡され申さぬ然ば仰に隨ひて御心入の車戴かんと厚く禮を述べ頓て其車に打乘り此村をこうは出行けれ斯て初五郎は道すがら食を乞ひ又は里の幼童抔に頼みて車を曳せ万苦を積て漸々小田原へ來り近邊を此處彼處尋ねけれ共更に讐の手掛りも無其内天正も早十九年とあり文祿と改元して初五郎今年廿歳と成けれ共未だ讐の行衛少しも知ぬ此節初五郎思ふ樣我家を出既に八年に及べ共未だ讐の手懸りあし讐を覘ふ者曾我兄弟の宮へ詣ぬれば何時かは讐に廻り遭ふとぞ聞及べり爰は幸ひ處も近し然ば富士の裾野へ立越て兄弟の宮へ詣でなば神の引合せなどか無ちんやと思ひ立しを吉日に翌日とも云ぬ其儘直に出行ける爰に又加藤幸助は過し天正十二年飯沼勘平を殺し又闕り帳にてお勝を殺し夫より南都へ行しが爰にも永く居兼轉じて奥州へ立越兄の許に居たりし處兄の妻に不義を仕掛け忽ち事顯れしかば是に因て又此處をも逐電し遂に下野宇都宮を行き從弟某しを頼みて先茲に七ヶ年の間爲そともなく居たりける然るに此土地の人々先年より伊勢參宮の講中を結び月毎に掛錢をなして毎年春は闕を引き當りし者參宮そるとの定めにて幸助も此講に加入のことを勸められしが闕に當らば參詣せでは相成ぬ敵持身の由なきことて始めの程は掛錢も出さぬ居たりし處此節に相なり熟々思ふ樣我大坂を立退しより早八年にも及びたれば今は我を付覘ふ者も最早念を絶て尋ねまじ然ば今年こそ伊勢講に加はり闕を引て當りなば參宮そべしと思ひ立しは是幸助の運の尽とぞ思はれける因て幸助は世話人の許へ行き以來掛錢を出さ間闕を引せよと願みしに皆々承知し闕を引せたる處幸助が闕に當りしかば人々幸

助は仕合者なり今年迄掛錢も致さゝるに只一度闕を引て當りしとは是太神宮の御加護成んぬ然ば打立給ふ可とて夫々餞別なぞ致しければ幸助は大いに悦び夫より心靜かに支度をなし頓て伊勢路を指し打立し處日を經て小田原の宿へ着しけるに時しも黄昏のと成しが此日初五郎は曾我の社へ參詣なゑ小田原の宿外れまで戻りて車の中より行逢ふ人に一錢二錢の合力を乞居たる處幸助行懸りて常の非人と思ひ汝ハ壁への非人となる不便の者なり我今伊勢へ參詣そるなれば功德の爲合力致し取せるなりと首に懸たる錢四五十文を取出し夫請取れと投げ與へけるに初五郎有難ふと云ながら見れば錢の多きを不審して思はず顔を打見やるに此年來尋ねし讐幸助なれバ發と驚き俯伏ひきたり然るに幸助は初五郎を幼年の時見し儘にて其上此節の体なれば見紛ふと云ふも道理なり實に初五郎曾我の宮詣でを志ざしたると神明の引合せとぞ思はれける

○初五郎箱根へ車を押上る事　幷　松並主計初五郎を見て不審する事

扨も飯沼初五郎は讐幸助に出逢發と思ひけれ共曉られては一大事と素知らぬ顔して行過しが彼何れの旅店へ泊るかとて遠くより跡を付ノゝ行けるゑ旅店の女共東西より出來り頻りに幸助を引止ける其内一人の女幸介を只ある旅店へと引入しかば初五郎直此旅籠屋の門先へ車を付てい見たれど差當り何と爲べき樣もなく氣ばかり焦ちて内の樣子など窺ふ處旅籠屋よては忽ち店の戸口を鎖しければ彌々討べき手便無因て思案を遠らすに斯ては容易のとにては討難し讐は手足も達者なるに我は斯の如くの不具なれば所詮難難所に差掛りし時足の惱みを付込で不意を討より外は有まじ夫よゝ幸ひ彼箱根へ掛ると必定なれば我は是より

早く車を押上げ難所にて待受ん難所にて戰はゞ我に百倍の利あるべし是屈竟の謀計なりと思ひ付夫より箱根へ車を押上げ此方彼處と難所を尋ね廻りし内一方ハ深谷一方は藪竹生茂り其上足場は岩角にて甚だ嶮しき所有しかば茲こそ屈竟の場所と思ひ即ち此所へ車を停めけるが又熟々と思ひ出そに斯まで辛苦ハ盡せども讐への身なれば反り討に逢ふとも圖り難し年來の讐に逢ひ乍ら晴ての勝負も出來ざるとハ嗟我身程武運よ拙き者は有じ然りながら切てハ名乘逢し上輕傷なり共一太刀試み夫を冥途への土産として亡父様や此世に在す母人様への申譯せん斯る不具の身の是非も無赦去て給や亡父様ナヴ母様とと暫時は泪に暮たりしが其内に夜も早更て丑の半刻とも覺しき頃ほひ一人の旅人大小嚴肅合羽を着し火縄を振つゝ來りしが初五郎が泣居たる側へ直と寄て汝何者なれば夜更に浩る處をば彷徨ぞ挨名乘れ盗賊の類にても有けるかと問れて初五郎私しハ讐の非人にて勿々盗賊などにてはハはぜと云ふに彼の旅人火縄を振り〳〵光りに透して能く見れば盲ふに違はぜ如何にも讐への非人にて有ければ然らば吾少し休息そるなれバ車を脇へ寄す可とて夫より旅人は茲に暫く休み居ける

○五郎旅人に助太刀を頼む事　幷　旅人姓名を明し助太刀を請合事

斯て初五郎は彼の旅人を熟々と見るに小兵なれ共顔色逞ましく何様一器量有べき樣に見ければ我も斯く有ならんには讐と勝負せんといと易けれど足腰の利ぬこそ殘念なれ今が今とて此人を見る浦山しさよと思ひの餘りに貴所樣には夜更て此山中を御通りなさると何御用有ての儲に候やと問けるに彼武士申樣我は西國の者にて朋輩の者と議論を致し圖らぜ涙

人と成夫より諸國を廻り歩行なり聞ば這箱根の山中夜更に通れば妖怪の者出るとのとに付這ぜ地へ來掛りしを幸ひ修行の爲斯樣に夜更ては通るなり然るに人の申は僞り妖怪らしき者更に見當らぜと聞より初五郎夫は近頃御浦山しさとなり這初五郎とても無事の體にて有ならばと思はぜ云けるを旅人訝のり聞咎め羨ましとは汝が足の不自由なる故我々が如く達者に成度思ひてなりやと云ば初五郎仰の通り其御達者なるが御浦山しく偖夫に就き些御願み申度との候が憚り乍ら御聞届下さるゝやと聞れて旅人い其頼み度とは何事ぞ合力にても致し呉よと申のか非人と有ば合力せぬと言ふにも非ぜ然ばと懐中へ手を入るゝと初五郎否々然樣の義にては御座なく候と言ば旅人は然らば車を曳下呉よと申のかと聞れて初五郎は然樣とても無と言ふ旅人は偖い何を頼むぞ何事なるか言て見よと言れて初五郎は然らば某し申出さん然ながら必ぜ御違背は下さるまじきやと言ふに旅人い暫時考へ仔細に寄ては假令火水の中たり共引ぬ氣象の某しなれば隨分願ひを叶へて取せんィザ語るべしと背ひしかば初五郎先は早速の御承引千万以て有難くハ讐れは包まぜ申上ん私し儀は親の讐を討者にて其讐今夜明には此山中を越ゆる筈ゆゑ夜前より茲に來り待受ると雖も何を申も此形狀にては返り討に遭ふも圖られ難し然とて止にも止られず夫が爲茲にい扣へハなり斯る次第にてハ程に御出合ヤたるまぞ此身の幸ひ何卒助太刀去て給はらば是を生々世々の御情けと眞實を打明け頼ければ旅人は一々聞了りッテ其方は何れの者にて又姓名をば何と申さるゝと聞れて初五郎は然ばなり某しい太閤殿下御直參の御旗本飯沼勘平と申者の一子同苗初五郎元治と申者なり讐討の証據いみれ茲にと首に懸たる片桐が添狀の一札を取出し旅人の前に差

出せば旅人は一札を讀終り然ば其幸助と言者全く此處へ參るべきやと言に初五郎い如何にも小田原にて正しく見屆けい間此處へ參ると相違なくいと言ければ旅人は義を見て爲ざるは勇無きなり必ず氣遣ひ爲給ふな急度助太刀致そべし斯樣なとは武者修行の身の望みなり我こそは薩摩浪人松並主計と申者武士は相互ひ頓て幸助茲へ來らば美事討せて參らそべしと流石丈夫の一言に今まで打慕れ居し初五郎も忽ち心勇み立夫より兩人夜明迄しと待掛たり斯て早東雲も近づき人馬追々通行そるにぞ主計初五郎に打向ひ往來の旅人も斯多ければ隨分見外し給ふなと云ふ內暫らく人絶て折々只一二人づゝ通るのみなれば主計は兎角氣と探み出し若も今の內見外しい去給はぬやと氣を付ると雖も初五郎何ぞ見外そとのあるべき只一心に向ふの方のみ見て居たりしが早日も三竿の高きに上りたれ共未だ來らざるにぞ主計は不審し何なれば斯延引なそぞ御身幸助が泊りし處覺ゑありやと云に初五郎は如何にも覺ゑ居りい西側にて出外れより二軒目にて有しと云ば主計は然らば某し行て見來らん程に暫時待居給へと言つゝ麓へと走り行二軒目の宿屋へ行て窺ふに這方い幸助急がぬ旅の習ひと去て夜と俱に酒宴し殊の外羽過したる体にて今漸くと草鞋を穿立出る有樣なれば主計此体を見より急ぎ立歸り初五郎に只今二軒目の宿より六尺餘りの大男出掛たり察そる處是幸助に相違なしと思ふなれば最早間もなく來るべし用心せられよ飯沼氏見外そと有可らずと言て主計も手早く身支度をなし幸助の來るを今や遲しと待掛たり

○加藤幸助箱根山へ掛る事　并　初五郎主計の助太刀にて首尾能讐を復す事

扨も加藤幸助は夜前の酒氣未だ醒切ね共旅中のと故遲々ながら紺の合羽を着用なし腰には

長き大小を帯し笠を冠り草鞋を穿き緩々宿屋を立出頓て箱根山へと差掛り杖にもたれ山路を辿る足遲にも休みては立立ちては休み東西と見廻しつゝ來るを初五郎も早くも見付け主計に向ひ彼奴こそ當の讐加藤幸助なりと聞より主計心得たりと一刀携へ幸助が歩行來る向ふへ立塞り大音に加藤幸助待と言ふ聲に驚き幸助ハコハ心得難き姓名呼はり我名を知て止る汝ハ扨も何者にて又我に何用有てのとなるぞと云ば主計ハ呵々と打笑ひ我は松並主計と言ふ者なり此車の中に居るは飯沼初五郎元治とて汝が討し勘平殿の嫡男父の讐を報せん爲め永年汝を尋ねし處今日今汝に出逢と雖も不具なる身故汝との勝負相叶はず依て我に其助太刀を頼みたれば我今汝に立向ふなり率尋常に勝負せよ仔細ハ其身に覺ゑ有んと聞て幸助は如何にも正に覺ゑ有なり然乍ら見れば腰も立ざる不具者として我をば讐と覘ふと片腹痛き次第なり又其腰抜の助太刀をる己れ等如きの弱腕者此幸助に二人三人掛りしとて何と爲べきとも成まじよし〳〵汝諸共討果し後害の根をば斷可と云ば主計ハ火と急立其大言ハ死でから言へ何程汝威かしを言とも最早遁れぬ籠の鳥覺悟ひろげと言ければ幸助も心得たりと笠を脱合羽を取除け三尺二寸の大業物を抜放そにぞ主計も直ちに立向ふ此際に初五郎は豫て自身拵へ置し竹片の弓を取出し早くも矢を番ひ年來の恨み一矢なり共受取れと切て放てば過またず其矢幸助が胸板に確と立ければ主計得たりと付入て矢庭に幸助が右の腕を切落せしとぞ幸助手早く左の手にて脇差を抜殘念なりと切て懸るを主計飄然と身を變し又付入て左りの腕をも打落す打落されて流石の幸助早叶はじとや思ひけん宛然夜叉の荒たる如く血眼に成て主計が腕に喰付ければ主計直ちに襟と帯をバ確と掴み力に任せて直と初五郎

が車の前に曳摺り來り助太刀なれば兩腕をこそ打落したれ絶息の一刀早々其方刺れよと聞と齊しく初五郎ハ思ハ也腰の立しかば是を不思議と自分ながらに呆れ果暫時ハ物をも得言ざりしが本望遂て嬉しきまゝに吾身のとは差置て直ちに絶息をぞ刺たりける主計は悦ぶ事限りなく出來されたり初五郎殿扨今迄も起ざる足の急に起しハ不思議なり御邊今までハ偽りしかと云れて初五郎は否々決して偽り申さぬ某しも誠に不審せしなり是と申も其方の御厚恩を受しに因年來の本望を達したる故嬉しさの餘り難病の足も起しに覺ゑぬ御禮の程言語に尋か盡し申さん此上共に宜しくと云に主計は然ば一刻も早く所の奉行に訴へんとて夫より兩人打連立麓へ下り奉行所へとてそは急ぎけれ

○初五郎主計の兩人秀吉公の御前へ出る事　并　主計御直參になる事

斯て兩人は代官所へと出事の由を訴へければ早速役人の者兩人を引連れ檢視として立越委細を取調べて立戻り而して兩人をば代官所へ留置き頓て大坂へ使者を立て此由言上致しけるに折から秀吉公には朝鮮御征伐として肥州名護屋に御出陣在しければ早速貝塚權太夫吉岡十兵衛と云る兩人先小田原へ下り二人を連て直ちに名護屋へと赴ふきける時に文祿元年九月廿七日なり斯て貝塚吉岡の兩人ハ急ぎ太閤の御前へ出右の趣ふき委細申上し處飯沼松並の兩人を御前へ召出され事の由言上致そべき樣仰有ければ初五郎乃ち段々の次第を言上なしけるに秀吉公甚た感じ給ひ約束なればとて先知三千石は其儘外に三千石の御加增まで有て都合五千石下され名をも勘平と改むべき樣仰せ付られしかば初五郎は有難しと申て御請す次に松並主計と武士の節義を守り只一言の頼みに助太刀致したる段奇特なりとて新知

千石賜り以來御直參を仰付らる然る程に兩人い天へも昇りし如く大いに悅び貝塚吉岡へも厚く一禮を述べ夫より御暇を願ひて大坂へ立歸り母に對面して偖諸事万端の物語りしければ母の悅び譬へ方なく死したる者に遭たる如く餘りの嬉しさに亡父勘平幷びに家臣十次兵衛の在ぬを打歎き急に佛壇に向ひ香華を手向暫くは稱名なしてゐ居たりける偖又松並も義心に因て思ひ寄ぎ御直參となり高も千石頂戴しければ是より彌よ飯沼と因み深く両家追々繁昌ぎて美名を四方に響かせしい目出度かりける事共なり

○初五郎昔日の禮と云て所々へ立越る事　幷　九十九家の娘おかよを妻と定る事

斯て初五郎は辛苦中所々にて憐情を掛くれし者の方へ立越其恩を報ひんとて翌文祿二年の春に及び百日の御暇を賜り供人も數多召連れ五千石の格式にて大坂を打立ち先一番に谷十次兵衛が死せし奥州路なる川端の家へ赴き老人未だ達者なるやと尋ぬるに老人堅固にて有ければ大よ悅び早速對面して段々の禮を述ける處老人は宛然我子の出世したる如くに思ひ暫時嬉し涙に咽び物をも得言ず在しかば初五郎乃ち白銀五十枚を遺し暇乞して別れける夫より奥州九十九新左衛門が方へ行飯沼初五郎元治立越たりと言入れけるに親子立出是はと驚きしが中にも娘おかよい只夢の如くに思ひ做し夢ならば覺さで欲や此夢をと起つ臥つゝ悅びしい道理ところ見にけれ斯て初五郎直と奥へ通り先新左衛門夫婦に面會し是まで尽せし艱難辛苦を物語り其上段々の一禮を述べ縮緬十五卷と白銀百枚を取揃へ新左衛門の前へ差出しければ夫婦の者も甚く悅び夫にてこそ我等夫婦の眼違はざりし實に天晴なる御事哉とて或は感じ或は其辛苦を推察し頓て酒肴を用意し饗應しければ初五郎も大いに酩酊し其夜い茲に宿りける斯て翌日になり初五郎新左衛門に打向ひ豫て御約束なれば忍女い此方へ申受べし然乍ら拙者と當時殿下御直參の身なれば其方より直引取と成難く依て同じ直參なる松並主計を里親と定め申可と云に新左衛門承知しければ乃ちおかよを連れ暇乞して立出夫より白坂宿の旅籠屋へ立寄り是へも厚く禮を述白銀五十枚を遣し又百姓喜助方へ行き是へは長く世話に成しとて喜助に白銀百枚村中の者へ二百枚禮を遣いしけるに百姓共い只々惘然果逃出ぎ者あるも可笑かりし夫より小田原の代官へ廻り同じく禮を述て大阪へ立歸り松並氏を里親として目出度おかよを妻に定め中も睦敷暮しける其後年經て頃い慶長二年太閤御他界となり同く五年石田三成家康公を討んとして關ヶ原に出陣し國々の軍勢雲霞の如く大坂へ集りける

○飯沼勘平出陣の事　幷　池田備中守と組合最期の事

于時慶長五庚子歳大阪方にては石田治部少輔三成關東德川家を打亡さんとして已れ首謀となり四國西國の大軍を催促し八月の下浣よりして濃州大垣の城に諸軍を集めける此折柄關東方には家康公上杉景勝征代として野州小山に出陣せられ既に大軍會津へ押寄んと爲時京、地の細作より伏見の城落去し鳥居彦右衛門元忠討死せしと注進有しかば大いゝ驚き給ひ少將秀康公を會津の押へと云て殘し置れ御身自ら軍を上方へと差向らる爰に飯沼勘平元治い無二の忠心と云ひ殊に故太閤の御恩を蒙ると海よりも深く山よりも高かりしかば此度の軍假令石田の發意と雖も既に幼君秀頼公の御爲と有に何かい以て猶豫べき諸軍勢と同じく大垣城に出陣し天晴大功を立先君の御恩を報ひんと思ひ關東勢に今や打掛らんと勇み居たり

けり折から岐阜中納言秀信卿にも大阪方となり木曾川を隔て東軍を支んと爲けるにさ垣より援兵として諸軍打出しければ飯沼勘平も河瀬左馬介抔と同じく援兵に赴きし處早東軍逆卷く木曾川の流を押渡り岐阜城を只一揉にと押寄しかば飯沼勘平い最前より好敵もがなと見て有内に東軍の方より堤五郎兵衛大塚何某と云者進み出で堤い岐阜方なる前田半左衛門に渡り合ひ大塚は同じく武市善兵衛に立向ひしが堤は前田に討るゝと雖も武市は危く大塚に討れんとす掛りたる處に武市が舍弟忠左衛門と云者馳來り矢庭に大塚を目掛討て掛るに大塚是をとともせず右に支へ左に當る其内に直と入て遂に兄弟の者を見事に討果しければ此休を見て岐阜勢誰一人討て出る者も無りける勘平儲社と思ひ其首還せ我請取ん我こそは大阪方に名を得る飯沼勘平元治と言者なり還せ〳〵と呼はりて鎗を小脇に抱込み駒馳寄て相對ふに大塚も心得たりと駒立直し待間程なく両人火花を散して戰ひけるか忽ち大塚突伏られ馬より揆と落たれば勘平も續いて馬より下り右手指を拔き水も溜らぬ首搔落し立たりしは天晴豪勇の者と見なにける斯て勘平は徐々引揚んとして遙か向ふの岡を見れば武者一騎扣へて在り續く兵有ずと雖も武具の立派なるい必定名ある勇士ならんと思ひ落在に進んで名乘懸けるが推量に違はず此い池田備中守にてぞ在ける備中守斯と見より同じ鎗を合せんとそるに郎等の伊東與兵衛なる者勘平が前に立塞り主從力を戰せ追つ卷りつ戰ふと雖も勘平少しも恐るゝ色なく右に衛き左に當り既に主從今は危く見たる處に池田が軍勢忽ち四方より集り來り只一人の勘平を前後左右に取圍みしかば勘平勇なりと雖も多勢に無勢さ〻ふるに由なく今は早是までと思ひ最期の一戰見よや〳〵と呼はり乍ら篠り立たる池田の勢を彼方へ切伏せ此方へ薙り頓て馬を一所に停め鎧を脫捨腹搔切て死たりしい目覺しくも又天晴なりける振舞なり勘平當年廿九歳十三の時より辛苦を盡し父の怨敵を首尾よく討ち又恩顧の主家に忠義を蓋し血氣盛りを散る花の身と爲してそ復なき壯士と思はれけれ

箱根權現躋雛討畢

けり折から岐阜中納言秀信卿にも大阪方となり木曾川を隔て東軍を支んと爲けるに大垣より援兵として諸軍打出しければ飯沼勘平も河瀬左馬介抔と同じく援兵に赴きし處早東軍逆卷く木曾川の流を押渡り岐阜城を只一揉にと押寄しかば飯沼勘平い最前より好敵もがなと見て有内に東軍の方より堤五郎兵衛大塚何某と云者進み出で堤い岐阜方なる前田半左衛門に渡り合ひ大塚は同じく武市善兵衛に立向ひしが堤は前田に討るゝと雖も武市は危く大塚に討れんとす掛りたる處に武市が舍弟忠左衛門と云者駈來り矢庭に大塚を目掛討て掛るに大塚是をとともせず右に支へ左に當る其内に直と入て遂に兄弟の者を見事に討果しければ此休を見て岐阜勢誰一人討て出る者も無りける勘平偖社と思ひ其首還せ我請取ん我こそは大阪方に名を得る飯沼勘平元治と言者なり還せ〳〵と呼はりて鎗を小脇に抱込み駒駈寄て相對ふに大塚も心得たりと駒立直し待間程なく両人火花を散して戰ひけるか忽ち大塚突伏られ馬より揉と落たれば勘平も續いて馬より下り右手指を抜き水も溜らず首搔落して立たりしは天晴豪勇の者と見るにけり斯て勘平は徐々引揚んとして遙か向ふの岡を見れば武者一騎扣へて在り續く兵有ずと雖も武具の立派なるい必定名ある勇士ならんと思ひ揚在に進んで名乘懸けるが推量に違はず此い池田備中守にてぞ在ける備中守斯と見より同じ鎗を合せんとそるに郎等の伊東與兵衛なる者勘平が前に立塞り主從力を戰せ追つ卷りつ戰ふと雖も勘平少しも恐るゝ色なく右に衛き左に當り既に主從今は危く見たる處に池田が軍勢忽ち四方より集り來り只一人の勘平を前後左右に取圍みしかば勘平勇なりと雖も多勢に無勢なるに由なく今は早是までと思ひ最期の一戰見よや〳〵と呼はり乍ら猛り立たる池田の

勢を彼方へ切伏せ此方へ薙り頓て馬を一所に停め鎧を脱捨腹搔切て死たりしい目覺しく又天晴なりける振舞なり勘平當年廿九歳十三の時より辛苦を盡し父の怨敵を首尾よく討ち又恩顧の主家に忠義を蓋し血氣盛りを散る花の身と爲してそ復なき壯士と思はれけれ

箱根權現鬚鬣討畢

明治二十二年三月二十日印刷
明治二十二年三月廿五日出版

發行者　門戸平吉　神田區松枝町廿四番地

印刷者　上原東一郎　京橋區加賀町十七番地

發賣所　目茶安堂

特10
964

091244-000-5

特10-964

箱根権現讐仇討

門戸　平吉／刊

M22
DBN-2098